

漢法苞徳塾資料	No. 187
区分	治療論・鍼法
タイトル	体表と鍼法について ～体表面の状態と鍼法の選択問題～
著者	八木素萌
作成日	1996.09.08

◎四大治法……『靈枢』九鍼十二原第 1

「…凡用鍼者・虚則実之・満則泄之・宛陳則除之・邪勝則虚之…」

◎三変刺……『靈枢』寿夭剛柔第 6

「…營之生病也・寒熱少氣・血上下行・衛之生病也・氣痛時来時去・佛愾賁響・風寒客于腸胃之中・寒痺之為病也・留而不去・時痛而皮不仁・黄帝曰・刺寒痺内熱奈何・伯高答曰・刺布衣者・以火焯之・刺大人者・以藥熨之・…」

「…刺營者出血・刺衛者出氣・刺寒痺内熱…」

- ・「營之生病」には「寒熱少氣・血上下行」「刺營者出血」とあり。
- ・「衛之生病」には「氣痛時来時去・佛愾賁響・風寒客于腸胃之中」「刺衛者出氣」とある。
- ・「寒痺之為病」には「留而不去・時痛而皮不仁」であるから

「刺寒痺内熱…刺布衣者・以火焯之・刺大人者・以藥熨之」となる。

斯様な要約された認識が見られる。

◎六変刺……『靈枢』邪氣蔵府病形第 4

「…諸急者多寒・緩者多熱・大者多氣少血・小者血氣皆少・滑者陽氣盛微有熱・濇者多血少氣 微有寒…」

「…刺急者・深内而久留之・刺緩者・浅内而疾発鍼・以去其熱・刺大者・微瀉其氣・無出其血・刺滑者・疾発鍼而浅内之・以其瀉其陽氣・而去其熱・刺濇者・必中其脈・隨其逆順而久留之・必先按而循之・已発鍼・疾按其痛・無令其血出・以和其脈・諸小者・陰陽形氣俱不足・勿取以鍼・而調以甘藥也…」とある。

ここで「六変」と言うのは明らかに「急」「緩」「大」「小」「滑」「濇」と言う体表の状態を指している。それらの状態が示している病態論的な意味合いも述べている。つまり、「寒」＝急、「熱」＝緩、「多氣少血」＝大、「血氣皆少」＝小、「陽氣盛微有熱」＝滑、「多血少氣微有寒」＝濇・等である。

刺法については次の通り

- ・「急」〈寒〉→「深内而久留之」
- ・「滑」〈陽氣盛微有熱〉→「疾発鍼而浅内之・以其瀉其陽氣・而去其熱」
- ・「緩」〈熱〉→「浅内而疾発鍼・以去其熱」

- ・「大」〈多気少血〉→「微瀉其気・無出其血」
- ・「濇」〈多血少気微有寒〉→「必中其脈・隨其逆順而久留之・必先按而循之・已発鍼・疾按其痛・無令其血出・以和其脈」
- ・「小」〈血気皆少・陰陽形気俱不足〉→「勿取以鍼・而調以甘藥」

◎3種類の気の状態と対応する刺法

『靈枢』根結第5に「慄悍・滑・濇」に対応する刺鍼技法を述べる。

「…気滑即出疾・其気濇則出遲・気悍則鍼小而入浅・気濇則鍼大而入深・深則欲留・浅則欲疾・以此觀之・刺布衣者深以留之・刺大人者微以徐之・此皆因気慄悍滑利也…」

ここでは「気の状態」を「慄悍滑濇」に把らえており、また、「利」の程度に応じて「鍼の大小・太細」と「刺入深度」の「深浅」および「徐疾」とによって、状況に対応しようとしている。

- ・「滑」 → 「出疾」
- ・「濇」 → 「出遅」「鍼大入深」
- ・「悍」 → 「鍼小仕手入浅」
- ・「深」 → 「欲留」
- ・「浅」 → 「欲疾」
- ・「布衣」→ 「深以留」
- ・「大人」→ 「微以徐之」

◎五臓に応ずる刺法

◎九変に応ずる刺法

◎十二経に応ずる刺法

◎刺法・補瀉の選択原理……『靈枢』根結第5

日頃当塾が強調している原理が記述されている。

「…黄帝曰・形気之逆順奈何・歧伯曰・形気不足・病気有余・是邪勝也・急瀉之・形気有余・病気不足・急補之・形気不足・病気不足・此陰陽気俱不足也・不可刺之・刺之則重不足・重不足則陰陽俱竭・血気皆尽・五蔵空虚・筋骨髓枯・老者絶滅・壯者不復矣。形気有余・病気有余・此謂陰陽俱有余也・急瀉其邪・調其虚实。故曰有余者瀉之・不足者補之・此之謂也。故曰、刺不知逆順・真邪相搏・滿而補之・則陰陽四溢・腸胃充郭・肝肺内臆・陰陽相錯・虚而瀉之・則経脈空虚・血気竭枯・腸胃僝辟・皮膚薄著・毛腠夭癩・予之死期。…」